

学修成果の可視化に向けた取り組み、認証評価結果に関する事項、
および教職課程に関する点検・評価

2016. 2. 24

文学部評価分科会

I. 学修成果の可視化に向けた取り組み

1. 現状の説明

(1) 学部の専門科目の学修成果（ラーニング・アウトカムズ）を明示しているか。各科目の授業における「到達目標」を明示しているか。それらの適切性を定期的に検証しているか。

昨年度の自己点検評価報告書に記載したとおり、文学部は学部の理念・目的に基づいて、2011年秋、学部専門科目全体の学修成果（ラーニング・アウトカムズ）を以下の6項目に策定し、11メジャー1専修の体制で新カリキュラムがスタートした翌2012年度から実施し、同時に学部ホームページと履修要項で公開した。(1-1)その後、この学修成果の達成に向けて学部3ポリシーを定めた。

<文学部専門科目ラーニング・アウトカムズ>

- ①人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解、鑑賞、評価することができる。
- ②基礎的・専門的学知に基づいて、新しい知識と表現を創造することができる。
- ③論理的に思考し、適切な方法で情報の取得と処理を行い、物事の的確な判断ができる。
- ④母語および母語以外の言語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる。
- ⑤文化の多様性を尊重しつつ、世界市民として、生命の尊厳と平和を志向する。
- ⑥人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する。

また各科目の授業における「到達目標」は、シラバスの必須記載項目であるため、全科目が明記し、学内ポータルサイトで学生が見ることができるようになっている。

次に、上記のラーニング・アウトカムズおよび各科目の「到達目標」の適切性の検証については、学部の理念・目的に照らして適切か、具体的な測定・評価の観点から見て適切かの両面から行っている。具体的には、昨年度（2014年度）前期の各専門科目について、当該科目が上記ラーニング・アウトカムズのどの項目を担うのか、および当該科目の「到達目標」の測定をどう行っているかについて、各教員に担当科目1科目について「授業の『到達目標』に関する自己評価報告書」の提出を求め、計34科目の報告書が提出された。(1-2)

また、学部の各メジャーのコーディネーターの協力を得て、昨年度（2014年度）と今年度の学部全授業科目のシラバス上の「到達目標」が学生に分かりやすく書かれているか、測定方法を意識してかかかれているかを点検した。さらに、学部のメジャー制に関して学生へのアンケート調査を行った。また昨年度来、2017年度から実施予定の新カリキュラムの検討委員会でも、ラーニング・アウトカムズおよび「到達目標」の適切性について検証を行っている。今後、新カリキュラム実施以降も定期的に検証していく方針である。

(2) 学部の専門科目の学修成果（ラーニング・アウトカムズ）および各科目の授業における「到達目標」は、具体的な測定・評価の観点から見て適切か。

(1)で記した学修成果および「到達目標」の適切性の検証の結果、まずラーニング・アウトカムズについては、昨年度の自己点検評価報告書に記載したとおり、学部の理念・目的に照らして適切である。しかし、学部で現在行っている3ポリシーの一体的な具体化の作業に合わせて、学修成果をより可視化して測定できるような具体的な細目を定める必要性が認識された。また各科目の授業における「到達目標」についても、学部の理念・目的に照らして適切であり、以前に比べてわかりやすい表現が多くなっている一方で、抽象的な表現のものもかなり多く、到達度をどう具体的に

測定・評価するかという観点からは、適切とはいえないものがある。より具体的な「到達目標」の明記が望まれる。加えて、1科目あたりの「到達目標」の項目数は平均2項目余りであり、1項目という科目も少なくないことから、項目数を増やし一層具体化する必要がある。(1-3)

次に、「到達目標」と成績評価との関係については、シラバス点検の結果では、「到達目標」を達成した学生がどのような成績となるのかについて、教員の半数ほどが成績Aの到達基準または成績Bの到達基準として示し、残りの半数ほどがSあるいはCとしている。本学全体としては「B以上」として基準を示しており、この基準で極力統一する必要がある。因みに、本年度前期における授業アンケートでは、学生の到達目標の達成度の項目は、全学平均の3.41に対して、文学部の平均は3.39であり、昨年度前期の3.35よりわずかに上昇した。(1-4)

さらに、前述の「授業の『到達目標』に関する自己評価報告書」において、各科目の「到達目標」が学部ラーニング・アウトカムズのどの項目に該当するかを担当教員に最大3つまで示してもらった結果は、昨年の報告書に記載したように、以下のとおりである。(本年度は実施していない。)

LO s NO	①	②	③	④	⑤	⑥
該当数	45	39	37	17	14	6

「知識・技能」や「汎用的能力」に関する該当項目が多く、「態度・志向」に関わる該当項目が少ないのは、「態度・志向」に関わる科目が客観的で適切な評価が難しいことが理由と思われるが、それらをより良く測定・評価できる「到達目標」の具体化とその測定方法の開発が課題である。

(3) 学部の専門科目の学修成果(ラーニング・アウトカムズ)および各科目の授業における「到達目標」を可視化して測定・評価する具体的な方法を開発・実践しているか。

現在、学部の各科目の授業が学部のラーニング・アウトカムズのどの項目を担う科目なのかを明示したシラバスやカリキュラムマップは作成していない。各科目の授業のシラバスで履修者にこれを明示し、学部のラーニング・アウトカムズをより意識した内容の「到達目標」とするためにも、本学共通科目と同様に、これを行なう必要がある。

これに関連して、昨年度と本年度のシラバス点検では、各科目の授業における「到達目標」の具体的な測定・評価方法については、ほとんどの教員が「定期試験○% (または、最終レポート○%)、課題レポート△%、小テスト□%、授業中の参加態度@%」(合計100%)のように示しており、とくに課題レポートあるいは授業の感想等をポータルサイト上で提出させるという形式が定着しつつあり、到達度の測定に活用されている。この点は前述の「授業の『到達目標』に関する自己評価報告書」においても確認できた。定期試験と最終レポート以外に、毎回の小テスト、単元ごとの確認テスト、授業外のCollabTest(本学独自のポータル上のテストシステム)、課題レポートや予習ノート、学習の自己評価レポート、時間内小レポート、ワークシート、ピアレビューフォーム、ディスカッション内容のレポートペーパー、簡易なループリックなど、独自の測定ツールを活用しながら、より適切な測定・評価に努めている。また、授業アンケートにおける到達目標の達成度の項目や学生の意見・感想などからも、各教員は事後的に到達度を確認し、到達目標達成度の向上に努めている。

しかし、今後各授業が「到達目標」の測定・評価のさらに具体的な基準を示して可視化し、より適正・厳格な評価を目指す必要がある。そのためにも、学部として6項目のラーニング・アウトカムズの各項目をどのように測定・評価するのかを明示したループリックを作成し、さらに、各項目の内容を具体的に示した細目を明示する予定である。

2. 点検・評価

(1) 効果が上がっている事項

各科目の授業は、履修者に年々多くのそして様々な授業外学習課題を課して、単位の実質化と教育の質保証に努めている。また授業内でも、各種のアクティヴ・ラーニングを取り入れるなどしている。これらの様々な学生の努力と成果をより適正に測定・評価するために、各授業では、定期試験や最終レポートだけでなく、多様な方法を用いて「到達目標」の達成度を把握し、適正な評価につなげている。

また本学がAP（アクセラレーション・プログラム）事業に採択されたことにより、本学部の教員16人が2泊3日の合宿に参加して各種のアクティヴ・ラーニングの手法を学びながら、学修成果の具体的な把握の仕方についてもスキルを向上させており、まだ数は少ないが、授業の15回すべての「到達目標」を明記したシラバスも現れている。

(2) 改善すべき事項

各科目の授業の「到達目標」はわかりやすい表現が多くはなってきたが、到達度の測定・評価という観点からは、改善が必要なものがまだ多い。各教員が「到達目標」をより適正に測定・評価できるように、学部として、6項目のラーニング・アウトカムズの各項目をどのように測定・評価するのかを明示したルーブリックを作成し、さらに、各項目の内容を具体的に示した細目を明示する必要がある。

また、学内のポータルサイトには各授業ごとに学修支援のプログラムがシステム化されて、年々活用が進んでいる。そのなかで本年度から本格始動した「学習ポートフォリオ」があるが、本学部でもこれを活用している教員はまだ少ない。履修生が学習目標、学習メモ、学習履歴、提出課題、振り返りなどを入力でき、教員はそれらを一覧で見てコメントも入力できるようになっているため、学修成果の把握・評価のために今後さらに活用する必要がある。

3. 将来に向けた発展方策

(1) 効果が上がっている事項

「到達目標」の測定・評価をさらに向上させるために、本学が行なうFDセミナーに教員に一層積極的に参加してもらうとともに、学部独自でもこれを企画し、さらに年に2～3回程度教授会の際にも研修の機会を設けたい。なお、2016年3月実施の第2回のAP合宿研修には21人が参加する予定であるが、同様の機会をさらに積極的にもっていききたい。

(2) 改善すべき事項

「到達目標」の測定・評価を適正に行なうため、今後も毎年シラバスを点検して必要な勧告等を行なうとともに、昨年度に行なった『到達目標』に関する自己報告書をさらに具体的なものに修正するなどして、2年に1度をメドに「到達目標」の適切さを総合的に検証する機会を設けたい。

またラーニング・アウトカムズの各項目ごとのルーブリックの作成と細目の策定は、2017年度からの新カリキュラムの実施に向けて、3ポリシーの一体的な具体化の作業と連動させて行なっていきたい。

なお、「学習ポートフォリオ」の活用については、全学のポートフォリオ委員会と連携し、研修の機会を増やしたい。

4. 根拠資料

- 1-1 2012 年度履修要項
- 1-2 「授業の『到達目標』に関する自己評価報告書」(2014 年度)
- 1-3 2014, 2015 年度シラバス
- 1-4 2015 年度前期授業アンケート結果

II. 認証評価結果に関する事項

1. 現状の説明

- (1) 「[基準5]学生の受け入れ」に関して、「過去5年間の収容定員に対する在籍学生比率が(平均)1.22と高いので、改善が望まれる」

文学部は2014年度認証評価において、「[基準5]学生の受け入れ」に関して、「過去5年間の収容定員に対する在籍学生比率が(平均)1.22と高いので、改善が望まれる」とされた。本学部には2011年度4月から社会福祉専修が開設されたため、《実験・実習を伴う分野(心理学・社会福祉学に関する分野を含む)》の比率基準である「1.20以上：努力課題」が当てはめられたと考えられる。しかし、毎年社会福祉専修の在籍学生数は定員の20名以内に収まっている。因みに2011年度17名、2012年度16名、2013年度19名、2014年度20名、2015年度20名であり、定員管理はできている。(1-1)

本学部の定員は2012年度までは390名、2013年度より370名である。社会福祉専修はごく少人数の専修であり、定員管理が厳格に行われているので、本学部としては、《実験・実習を伴う分野》と《医学・歯学》を除く《それ以外の分野》の比率基準である「1.25以上：努力課題」で認証・評価してもらいたい。(1-2)

2. 点検・評価

- (1) 効果が上がっている事項

- (2) 改善すべき事項

本学部の過去5年間の在籍学生比率は、2011年度1.234倍、2012年度1.225倍、2013年度1.223倍、2014年度1.229倍、2015年度1.242倍であり、2013年度以降若干の増加傾向にあるので、可能な限り1.20に近づけるよう学生受け入れを適正化する努力は必要である。(1-2)

3. 将来に向けた発展方策

- (1) 効果が上がっている事項

- (2) 改善すべき事項

在籍学生比率の適正化については、現在本学部でも検討している入試制度改革の今後の方向性とタイアップさせてその実現に努力していきたい。新たな選抜方法を採用する場合、年度によって入学生の入れ目標に対する合格者の歩留まり率の変動が極力少なくなる方策を考えたい。

4. 根拠資料

- 1-1 定員超過率 2005 - 2015 (文科省報告数) 資料
- 1-2 同上

Ⅲ. 教職課程における点検・評価

領域 1 : 教職課程の理念・目的

1. 学部・学科の教員養成に対する理念・目的が明確になっていること。

現在のところ本学部・学科の教員養成に対する理念及び構想を明記しておらず、したがって内外に公表していない。本学部・学科に設置されている中学・高等学校「英語」「国語」および中学校「社会」、高等学校「地理歴史」「公民」の教職課程に相応しい教員養成理念・構想を、学部教職委員会での検討をふまえ、学部教授会において早急に明文化し、内外に広表する方針である。その際、本学部・学科の教員養成の理念として、本学部・学科の三指針「生命の尊厳の探求者たれ!」「人類を結ぶ世界市民たれ!」「人間主義の勝利の指導者たれ!」を勘案し次の文言を盛り込み、明文化する予定である。

- (1) 生徒一人ひとりの個性と可能性を尊重できる教員の養成
- (2) 広い教養を備え、チームワークで教育に当たる教員の養成
- (3) 現場対応力があり、リーダーシップを発揮できる教員の養成

2. 学部・学科の教員養成理念に応じて教職課程カリキュラムが検討されていること。

現在、本学の建学の精神については共通科目の中の大学科目(選択必修)で学び、本学部の三指針については学部の必修科目である「人間学」で学ぶことができる。また学部の全教員がそれらを意識しつつ全ての授業を展開している。明文化する予定の理念(1)「生徒一人ひとりの個性と可能性を尊重できる教員の養成」については、大学科目や「人間学」、教職課程科目の他、学部が提供する多くのリベラルアーツ科目を通して多面的な角度から、生命の尊厳と人間一人ひとりの個性と可能性を尊重する精神と態度を学ぶことができると考えられる。

理念(2)「広い教養を備え、チームワークで教育に当たる教員の養成」については、教職課程科目や多くのリベラルアーツ科目で得られる広い教養と知識とともに、それらの授業に取り入れられているアクティブ・ラーニングで身につけた協働型学習により、生徒・教員がチームとなって励まし啓発し合う、授業力のある教員を育成することができると考えられる。

理念(3)「現場対応力があり、リーダーシップを発揮できる教員の養成」については、現在検討中の2017年度から実施予定の本学部の新カリキュラムにおける学部独自のインターンシップ科目の新設とともに、教職課程履修者に対し、学校インターンシップを科目化・必修化し、さらに学校ボランティアを推奨することを考えている。また現在正課外で「教職希望者大会」を年2回開催して、本学部卒業生の現役教員を招き、学校現場の取り組みについて報告・相談してもらう機会を設けているが、これをさらに活性化したい。なお、3年・4年次の専門ゼミにおいても、ゼミ担当教員が教職を目指す学生に対して、リーダーシップが身につくように、意識的に指導するようになりたい。

3. 教職課程カリキュラムにおいて、学年・semesterごとの到達目標が明確になっていること。

これも明文化されていなかったもので、別掲のように、各教科ごとに明文化したい。

領域2：教職課程カリキュラム

1. 「教科に関する科目」(学科の専門科目)の必修科目において、教育職員免許法施行規則第4条及び第5条第1項表に定める科目において一般的包括的な内容が含まれているかをシラバスで確認していること。

本学部において対象となる科目は、次の通りである。

「英語」：英語学概論Ⅰ・Ⅱ、英米文学概論Ⅰ・Ⅱ

「国語」：日本語学概論Ⅰ・Ⅱ、日本文学概論Ⅰ・Ⅱ、日本文学史、漢文学特講Ⅰ・Ⅱ、書道Ⅰ・Ⅱ
(書道は中学校のみ)

「社会」「地歴」：日本史概説Ⅰ・Ⅱ、西洋史概説Ⅰ、東洋史概説Ⅰ、地理学Ⅰ・Ⅱ、地誌学Ⅰ・Ⅱ、人文地理学、自然地理学(最後の2科目は高校のみ)

「社会」「公民」：法学、社会学概論、政治学原論(最後の科目は高校のみ)

これらすべての科目のシラバスを点検し、いずれも一般的包括的内容が含まれていることが確認できた。

2. 学部・学科の教職担当教員が明確になっていること。また教職キャリアセンターとの連携が図られていること。

本学部に教職委員会を作り、構成員を学部長、副学部長と「英語」担当教員2名、「国語」担当教員2名、「社会」「地歴」担当教員1名、「公民」担当教員1名(副学部長兼任)、教職大学院教員(校長経験者)1名、教職キャリアセンター職員2名、学部事務局職員2名で構成している。2カ月に1度程度委員会を開き、学部の教員養成のあり方について議論している。また、上述したように、年に2回(6月と11月)文学部教職生大会を開き、教職キャリアセンター職員に必ず教員採用試験や採用状況について話をしてもらうなど、教職キャリアセンターとは連携がとれている。さらに、教職委員会は、教授会に教職に関する様々な情報を提供したり、教職生大会の状況を報告して、学部教員の教職生育成への意識を喚起している。

3. 学科所属の学生の教育実習において学科の専任教員が教育実習先に訪問指導していること。

東京都内で行われる教育実習にはゼミ担当教員(専任教員)が必ず実習校を訪問し、学生受け入れに対する御礼の挨拶をするとともに、実習校の担当教諭から意見をもらい、実習生を指導している。東京都以外の場合にも、実習校に一度以上ゼミ担当教員が学生受け入れについての御礼の電話をすることになっている。ただ、一度だけでは実習生に対する意見を聞くことができないので、最低もう一度電話で確認する機会を持つようにしていきたい。

領域3：学生支援

1. 学部・学科において教職課程履修者にキャリア支援が適切に行われていること。

基本的には、大学の教職キャリアセンターがキャリア支援のための具体的なプログラムとアドバイスを行なっている。くわえて本学部としては、領域2の2で述べたように、年に2回文学部教職生大会を行っている。6月の大会は教職課程の履修登録をした学生のための教職学習スタートの大

会であるとともに、卒業生教員が教育現場のようすを報告する大会である。11月は教員採用試験が終わり、合格した学生が合格体験と教員としての抱負を語る大会である。どちらの会合でも教職キャリアセンターの職員が教員の心構えや教員採用の状況について話し、また会合終了後、教職生や教職に関心のある学生たちが卒業生教員や合格者と話す「相談コーナー」を設けることで、学部としての（教職）キャリア支援が行われている。参加学生たちは、今後の相談のために卒業生教員たちと連絡先等の情報を交換している。なお、教職生大会の案内は学部ポータルサイトにより、教職生に一斉メールが送られている。

領域4：教員

1. FD等を通じて学科の専任教員が教職課程についての認識を深めていること。

教職課程への認識を深めるためのFDは行われていない。しかし、毎年、学部で100名ほどの学生が教職課程に登録し、現役と卒業生合わせて20名程が教員採用試験に合格している。合格者を増やすためにも、教員側の教職生を育成する意識を高めなければならず、FDは必要である。現在は教職委員会から教職についての情報提供や教職生大会の案内と報告が教授会においてなされる程度である。今後は3年・4年次の専門ゼミにおいても、ゼミ担当教員が教職を目指す学生に対して、面談・アドバイスを行なう機会を増やすこと、また教職生の育成に関するFDの機会を設けることを検討している。

領域5：成果

1. 卒業生の免許取得状況

調査中である。

2. 卒業生の教員への就職状況

本学部生および本学部卒業生で2015年度教員採用試験に合格した者は2月段階の把握で次のとおりである。

「英語」：学部生4名、卒業生4名（さらに、期限付き合格者が学部生4名）

「国語」：学部生2名

「社会」：学部生1名

その他、私立高校に大学院生（卒業生）1名が「英語」非常勤講師として採用された。

*領域1－3 学年・semesterごとの到達目標は次頁以下のとおり。

<文学部人間学科>（認定課程：高等学校教諭1種 英語）

（1）各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学科目（選択必修）を通して建学の精神を学び、「人間学」（学部必修科目）を通して文学部三指針を学ぶ他、「アカデミックスキル基礎」（必修）でアクティブ・ラーニングの手法を身につける。それらと共に英語教師としての素地を養うための英語に関する知識と英語力を身につけることを目標とする。具体的には、英語を運用できる能力を養うために「Oral Communication」でスピーキング能力を育成する。さらに英語の音声や語の分析能力を養い、英語という言葉への理解を深めるために「英語学概論」の学習を開始する。卒業するまでに英検準1級に合格することを目指す。さらに、教職科目では、「教職概論」を履修して、教職の意義や職務内容等を理解し、教職選択の可否を自覚的に判断する。
	後期	引き続き「英語学概論」で英語に関する知識を深めるとともにグローバル科目の履修を通して英語運用能力（4技能）を高めることを目標とする。教職専門科目では、「教育原論」「教育心理」を履修して、教育をめぐる問題や教育心理学の基礎的知識を習得する。
2年次	前期	「英語科教育法Ⅰ」の学習を開始して、学習指導要領の内容を理解するとともに、指導の目標や指導技術に関する知識を身につけることを目標とする。さらに「英米文学概論」や「比較文化」の学習を通して、英語を教える上で必要となる文学に関する知識やその読み方、または異文化理解を深めることを目指す。他に、「生徒・進路指導論：教職」「教育相談」を履修して、生徒指導や進路指導の問題と課題を理解し、学生自身の教育相談のあり方を構築する。
	後期	「英語科教育法Ⅱ」の学習において、「英語科教育法Ⅰ」で学習した内容をもとに指導案の作成と模擬授業などの実践的な経験を積むことで指導計画の立案と授業の構成を理解し、さらには指導技術を身につけることを目標とする。引き続き、英語学、英米文学、英語コミュニケーション、異文化理解に関する知識を深めることを目指す。他に、「特別活動：教職」を履修して、教育に必要な人権意識を習得する。
3年次	前期	専門的な演習科目やベーシック科目、アドバンスト科目の学習を通して、第二言語習得論、音声学や英文法などの英語学の知識を身につけるとともに、英米文学に関しての理解を深めることを目標とする。さらに学校インターンを通して教育現場での教師の役割や生徒との関わりについて学ぶ機会を持つことを目指す。教職科目では、「教育行政」を履修し、教育関係の法規を理解する。
	後期	「英語科教育法Ⅲ」の学習において、「英語科教育法Ⅱ」で扱えなかった指導技術についての知識と模擬授業、教材開発などの実践練習を重ねて4年次での教育実習に向けての準備を整えることを目標とする。引き続き、学校インターンでの経験を通して、授業の構成や活動内容について具体的に理解することを目指す。教職科目では、「教育方法」を履修し、多様な学習指導方法を習得する。
4年次	前期	演習、学外の教育実習で、現場を想定したプレゼンテーション技法、学習指導案の作成要領を習得することを目標とする。3年間で培った英語科指導に関する知識を基礎として、教育基本法の掲げる教育の目的を理解したうえで、教育職に必要な知識力・教育技能を養う。授業展開では、基礎から発展への論理の組み立て方、発問法、手作り教材のほかに、生徒の心理に対応した指導力を向上させる。
	後期	教育実習演習で教育職に就くための資質能力が学生自身の内面に形成されたかどうかを確認し、知識力・教育技能を定着させることを目標とする。教育実習の経験を踏まえて、模擬授業の水準を向

	<p>上させるとともに、さらに「英語科教育法Ⅳ」では近隣中学校で実習をする機会を通して、教育現場で対応できる指導力を磨く。</p>
--	---

＜文学部人間学科＞（認定課程：中学校教諭１種 英語）

（１）各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	<p>大学科目（選択必修）を通して建学の精神を学び、「人間学」（学部必修科目）を通して文学部三指針を学ぶ他、「アカデミックスキル基礎」（必修）でアクティブ・ラーニングの手法を身につける。それらと共に英語教師としての素地を養うための英語に関する知識と英語力を身につけることを目標とする。具体的には、英語を運用できる能力を養うために「Oral Communication」でスピーキング能力を育成する。さらに英語の音声や語の分析能力を養い、英語という言葉への理解を深めるために「英語学概論」の学習を開始する。卒業するまでに英検準1級に合格することを目指す。さらに、教職科目では、「教職概論」を履修して、教職の意義や職務内容等を理化学習し、教職選択の可否を自覚的に判断する。</p>
	後期	<p>引き続き「英語学概論」で英語に関する知識を深めるとともにグローバル科目の履修を通して英語運用能力（4技能）を高めることを目標とする。教職専門科目では、「教育原論」「教育心理」を履修して、教育をめぐる問題や教育心理学の基礎的知識を習得する。</p>
2年次	前期	<p>「英語科教育法Ⅰ」の学習を開始して、学習指導要領の内容を理解するとともに、指導の目標や指導技術に関する知識を身につけることを目標とする。さらに「英米文学概論」や「比較文化」の学習を通して、英語を教える上で必要となる文学に関する知識やその読み方、または異文化理解を深めることを目指す。他に、「生徒・進路指導論：教職」「教育相談」を履修して、生徒指導や進路指導の問題と課題を理解し、学生自身の教育相談のあり方を構築する。</p>
	後期	<p>「英語科教育法Ⅱ」の学習において、「英語科教育法Ⅰ」で学習した内容をもとに指導案の作成と模擬授業などの実践的な経験を積むことで指導計画の立案と授業の構成を理解し、さらには指導技術を身につけることを目標とする。引き続き、文学や異文化理解についてさらにその知識を深めることを目指す。他に、「特別活動：教職」を履修して、教育に必要な人権意識を習得する。</p>
3年次	前期	<p>専門的な演習科目やベーシック科目、アドバンスト科目の学習を通して、英語学や英米文学に関する知識を身につけることを目標とする。さらに学校インターンを通して教育現場での教師の役割や生徒との関わりについて学ぶ機会を持つことを目指す。教職科目では、「教育行政」を履修し、教育関係の法規を理解する。</p>
	後期	<p>「英語科教育法Ⅲ」の学習において、「英語科教育法Ⅱ」で扱えなかった指導技術についての知識と模擬授業、教材開発などの実践練習を重ねて4年次での教育実習に向けての準備を整えることを目標とする。引き続き、学校インターンでの経験を通して、授業の構成や活動内容について具体的に理解することを目指す。教職科目では、「教育方法」を履修し、多様な学習指導方法を習得する。</p>
4年次	前期	<p>演習、学外の教育実習で、現場を想定したプレゼンテーション技法、学習指導案の作成要領を習得することを目指す。3年間で培った英語科指導に関する知識を基礎として、教育基本法の掲げる教育の目的を理解したうえで、教育職に必要な知識力・教育技能を養う。授業展開では、基礎から発展への論理の組み立て方、発問法、手作り教材のほかに、生徒の心理に対応した指導力を向上させる。</p>
	後期	<p>教育実習演習で教育職に就くための資質能力が学生自身の内面に形成されたかどうかを確認し、知</p>

	識力・教育技能を定着させることを目標とする。教育実習の経験を踏まえて、模擬授業の水準を向上させるとともに、さらに「英語科教育法Ⅳ」では近隣中学校で実習をする機会を通して、教育現場で対応できる指導力を磨く。
--	--

＜文学部人間学科＞（認定課程：高校教諭1種 国語）

（１）各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学科目での学びを通して、建学の精神について学び、文学部の必修科目「人間学」の履修を通して、文学部の三指針について学ぶ。そして、「アカデミック・スキル基礎」などの少人数科目を通して、アクティブな学びを身につける。また、イントロダクトリー科目の履修を通して、教養基礎の学びを開始する。さらに、中学校国語の目標に沿って、「国語学・国文学」の科目区分における一般的包括的科目である「日本語学概論」「日本文学概論」の学習を開始する。教職科目では、「教職概論」を履修して、教職の意義や職務内容等を理解し、教職選択の可否を自覚的に判断する。
	後期	引き続き、多様なイントロダクトリー科目を学び、世界に対する多様な視点を獲得する。また、前期に引き続き、「国語学・国文学」の一般的包括的な科目の学習を進め、専門教科力を身につけた教員を目指す。教職専門科目では、「教育原論」「教育心理」を履修して、教育をめぐる問題や教育心理学の基礎的知識を習得する。
2年次	前期	学部キャリア教育の中で、職業としての教員について考える機会を設ける。「国語学・国文学」の一般的包括的な科目である「日本語学概論」「日本文学概論」のさらなる学習を進めるとともに、「国語学・国文学」のより専門的な選択必修科目の学習を開始する。また、「漢文学」の学習を開始する。さらに、「国語科教育法Ⅰ」の学習を開始して、教育現場における具体的な国語科指導力を身につける。他に、「生徒・進路指導論:教職」「教育相談」を履修して、生徒指導や進路指導の問題と課題を理解し、学生自身の教育相談のあり方を構築する。なお、この期以降、3年後期までの期間において「学校インターンシップ」への参加を行う。
	後期	「国語学・国文学」の一般的包括的科目の学習を終えるとともに、さらに選択必修科目の学習を継続して、国語科の専門的能力を伸ばす。また、「漢文学・書道」の学習を継続する。さらに、「国語科教育法Ⅱ」の学習を進め、国語科指導力の確立を目指す。他に、「特別活動:教職」を履修して、教育に必要な人権意識を習得する。
3年次	前期	各科目区分の選択必修科目の学習を通して、国語科の学習を深めるとともに、可能な場合は「国語科教育法Ⅲ」の学習を進め、国語科の専門力・指導力を積み上げる。また、演習科目において、国語学・国文学・漢文学の専門力を高めるとともに、国語を適切に表現し正確に理解する能力、議論を通して互いに伝え合う力、チームワークで進める力を高める。教職科目では、「教育行政」を履修し、教育関係の法規を理解する。
	後期	各科目区分の選択必修科目の学習を通して、国語科の専門力を高める。また、演習

		科目においては、国語を適切に表現し正確に理解する能力を養成し、議論等のアクティブな活動を通して、互いに伝え合う力、チームワークで進める力を高める。それとともに、レポート執筆指導を通して、思考力・想像力を養いつつ、言語感覚を豊かにして、国語に対する認識を深める。教職科目では、「教育方法」を履修し、多様な学習指導方法を習得する。
4年次	前期	演習科目、教育実習において、現場を想定した多様なプレゼンテーションの技法、学習指導案の作成能力を習得する。3年間で培った一般教養・専門教養・教職教養を基礎として、教育基本法の掲げる教育の目的と高等学校国語科の目標を理解した上で、高等学校国語科教員として必要な知識力・教育技能を培う。また、卒業論文の執筆を通して、国語運用能力を育成し、言語感覚を磨いて、言語文化に対する関心を深める。
	後期	「教職実践演習」で、教育職を果たしうる資質・能力が形成されたかどうかを確認し、知識力・教育技能を定着させる。教育実習の経験を踏まえて、模擬授業の水準を向上させる。4年間の一般教養・専門教養・教職教養の履修成果を再検討した上で、知識を補充し、さらなる技能の向上を図る。また、卒業論文の完成を通して、国語運用能力を育成し、言語感覚を磨いて、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

<文学部人間学科> (認定課程：中学校教諭1種 国語)

(1) 各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学科目での学びを通して、建学の精神について学び、文学部の必修科目「人間学」の履修を通して、文学部の三指針について学ぶ。そして、「アカデミック・スキル基礎」などの少人数科目を通して、アクティブな学びを身につける。また、イントロダクトリー科目の履修を通して、教養基礎の学びを開始する。さらに、中学校国語の目標に沿って、「国語学・国文学」の科目区分における一般的包括的科目である「日本語学概論」「日本文学概論」の学習を開始する。教職科目では、「教職概論」を履修して、教職の意義や職務内容等を理解し、教職選択の可否を自覚的に判断する。
	後期	引き続き、多様なイントロダクトリー科目を学び、世界に対する多様な視点を獲得する。また、前期に引き続き、「国語学・国文学」の一般的包括的な科目の学習を進め、専門教科力を身につけた教員を目指す。教職専門科目では、「教育原論」「教育心理」を履修して、教育をめぐる問題や教育心理学の基礎的知識を習得する。
2年次	前期	学部キャリア教育の中で、職業としての教員について考える機会を設ける。「国語学・国文学」の一般的包括的な科目である「日本語学概論」「日本文学概論」のさらなる学習を進めるとともに、「国語学・国文学」のより専門的な選択必修科目の学習を開始する。また、「漢文学・書道」の学習を開始する。さらに、「国語科教育法Ⅰ」の学習を開始して、教育現場における具体的な国語科指導力を身につける。他に、「生徒・進路指導論:教職」「教育相談」を履修して、生徒指導や進路指導の問題と課題を理解し、学生自身の教育相談のあり方を構築する。なお、この期

		以降、3年後期までの期間において「学校インターンシップ」への参加を行う。
	後期	「国語学・国文学」の一般的包括的科目の学習を終えると同時に、さらに選択必修科目の学習を継続して、国語科の専門的能力を伸ばす。また、「漢文学・書道」の学習を継続する。さらに、「国語科教育法Ⅱ」の学習を進め、国語科指導力の確立を目指す。他に、「特別活動・教職」を履修して、教育に必要な人権意識を習得する。
3年次	前期	各科目区分の選択必修科目の学習を通して、国語科の専門力を高めるとともに、「国語科教育法Ⅲ」の学習を進めて、国語科の指導力を積み上げる。また、演習科目において、国語学・国文学・漢文学の専門力を高めるとともに、国語を適切に表現し正確に理解する能力、議論を通して互いに伝え合う力、チームワークで進める力を高める。教職科目では、「教育行政」を履修し、教育関係の法規を理解する。
	後期	各科目区分の選択必修科目の学習を通して、国語科の専門力を高める。また、演習科目においては、国語を適切に表現し正確に理解する能力を養成し、議論等のアクティブな活動を通して、互いに伝え合う力、チームワークで進める力を高める。それとともに、レポート執筆指導を通して、思考力・想像力を養いつつ、言語感覚を豊かにして、国語に対する認識を深める。教職科目では、「教育方法」を履修し、多様な学習指導方法を習得する。
4年次	前期	演習科目、教育実習において、現場を想定した多様なプレゼンテーションの技法、学習指導案の作成能力を習得する。3年間で培った一般教養・専門教養・教職教養を基礎として、教育基本法の掲げる教育の目的と中学校国語科の教科目標を理解した上で、中学国語科教員として必要な知識力・教育技能を培う。また、卒業論文の執筆を通して、国語運用能力を育成し、言語感覚を豊かにして、国語に対する認識を深める。
	後期	「教職実践演習」で、教育職を果たしうる資質・能力が形成されたかどうかを確認し、知識力・教育技能を定着させる。教育実習の経験を踏まえて、模擬授業の水準を向上させる。4年間の一般教養・専門教養・教職教養の履修成果を再検討した上で、知識を補充し、さらなる技能の向上を図る。また、卒業論文の完成を通して、国語運用能力を育成し、言語感覚を豊かにして、国語に対する認識を深め、国語を尊重する態度を育てる。

<文学部人間学科>（認定課程：高等学校教諭1種 地理歴史）

（1）各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	<p>本学の建学の精神を大学科目（選択必修）で学び、本学部の三指針を「人間学」（必修）で学ぶ他、本学と本学科の教職課程の理念・目的を「教職ガイダンス」において理解する。また、「アカデミックスキル基礎」（必修）でアクティブ・ラーニングの手法を身につける。それらと共に、共通科目や文学部イントロダクトリー科目で、人文・社会科学関係の幅広い教養を身につけ、そこから学生自身の専攻分野（メジャー）を考える。教職科目では、「教職概論」を履修して、教職の意義や職務内容等を理解し、教職選択の可否を自覚的に判断する。</p>
	後期	<p>前期に引き続き、共通科目やイントロダクトリー科目・ベーシック科目で、人文・社会科学関係の教養を深め、学生自身の専攻分野（メジャー）を決定する。教職専門科目では、「教育原論」「教育心理」を履修して、教育をめぐる問題や教育心理学の基礎的知識を習得する。</p>
2 年次	前期	<p>日本史及び外国史、地理学の必修概説科目（「日本史概説Ⅰ」「西洋史概説Ⅰ」「東洋史概説Ⅰ」「地理学Ⅰ」）を履修し、各分野の概要を習得する。さらに人文・社会科学関係のベーシック選択科目を幅広く履修し、専門的知識を習得する。教職科目では「地理歴史科教育法」を履修し、学習指導案を作成するスキルを習得する。他に、「生徒・進路指導論：教職」「教育相談」を履修して、生徒指導や進路指導の問題と課題を理解し、学生自身の教育相談のあり方を構築する。</p>
	後期	<p>前期に引き続き、日本史および地理学の必修概説科目（「日本史概説Ⅱ」「地理学Ⅱ」）を履修し、各分野の概要を一層広く習得する。さらに、人文・社会科学関係のベーシック選択科目を引き続き幅広く履修し、専門的知識を習得する。教職科目では「社会科教育法Ⅱ」を履修し、学習指導案作成のスキルを伸ばし、教育法の習熟を目指す。他に、「特別活動：教職」を履修して、教育に必要な人権意識を習得する。</p>
3 年次	前期	<p>地理学の必修科目（「人文地理学」「自然地理学」）の履修を通して、世界諸地域の間活動の特質及び気象学・地形学の知識を習得する。さらに、日本史及び外国史のアドヴァンスト選択科目、及び地理学の選択科目の履修を通して、歴史・地理関係の知識の専門性を高める。専門演習が始まるので、自分の専門分野を見定め、研究テーマを模索しながら、専門的知識の習得に努める。教職科目では、「教育行政」を履修し、教育関係の法規を理解する。さらに学校インターンに参加し、教育現場を体験する。</p>
	後期	<p>地理学の必修科目「地誌学」の履修を通して、世界や日本諸地域に関する知識を習得する。さらに引き続き、日本史及び外国史のアドヴァンスト選択科目、及び地理学の選択科目の履修を通して、歴史・地理関係の知識の専門性を高める。専門演習では、自分の研究テーマを設定して、文献蒐集や研究発表に取り組み、専門的知識を高める。教職科目では、「教育方法」を履修し、多様な学習指導方法を習得する。さらに、前期に引き続き、学校インターンに参加して教育現場の体験を積む。</p>
4 年次	前期	<p>学外の教育実習で、教室での教授技法、学習指導案の作成要領を習得する。3年間で培った一般教養・専門教養・教職教養を基礎として、教育職に必要な知識力・教育技法を培う。授業展開では、基礎から発展への論理の組み立て方、発問法、手づくり教材のほかに、生徒の心理に対応した指導力を向上させる。専門演習では、卒業論文の作成に取り組み、研究発表や討論を通して、研究テーマへの理解を深化させ、一層専門的知識を高める。</p>
	後期	<p>教職実践演習で、教育職に就くための資質能力が学生自身の内面に形成されたかどうかを確認し、知識力・教育技能を定着させる。教育実習の経験を踏まえて、模擬授業の水準を向上させる。4年間の一般教養・専門教養・教職教養の履修成果を再検討した上で、知識を補充し、技能を磨く。専門演習では、卒業論文を完成させる。</p>

<文学部人間学科> (認定課程：高等学校教諭1種 公民)

(1) 各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	<p>本学の建学の精神を大学科目（選択必修）で学び、本学部の三指針を「人間学」（必修）で学ぶ他、本学と本学科の教職課程の理念・目的を「教職ガイダンス」において理解する。また、「アカデミックスキル基礎」（必修）でアクティブ・ラーニングの手法を身につける。それらと共に、共通科目や文学部イントロダクトリー科目で、人文・社会科学関係の幅広い教養を身につけ、そこから学生自身の専攻分野(メジャー)を考える。教職科目では、「教職概論」を履修して、教職の意義や職務内容等を理解し、教職選択の可否を自覚的に判断する。</p>
	後期	<p>前期に引き続き、共通科目やイントロダクトリー科目・ベーシック科目で、人文・社会科学関係の教養を深め、学生自身の専攻分野(メジャー)を決定する。教職専門科目では、「教育原論」「教育心理」を履修して、教育をめぐる問題や教育心理学の基礎的知識を習得する。</p>
2年次	前期	<p>法律学、政治学及び経済学、社会学の4つの必修科目の中から2科目を履修し、さらに哲学、倫理学、宗教学の選択必修科目を1科目を履修して、各分野の概要を習得する。さらに、人文・社会科学関係のベーシック選択科目を幅広く履修し、専門的知識を習得する。教職科目では「社会科教育法Ⅰ」を履修し、学習指導案を作成するスキルを習得する。他に、「生徒・進路指導論:教職」「教育相談」を履修して、生徒指導や進路指導の問題と課題を理解し、学生自身の教育相談のあり方を構築する。</p>
	後期	<p>前期に引き続き、法律学、政治学及び経済学、社会学の4つの必修科目の中から残り2科目を履修し、さらに哲学、倫理学、宗教学の選択必修科目を積極的に履修して、各分野の概要を一層広く習得する。さらに、人文・社会科学関係のベーシック選択科目を引き続き幅広く履修し、専門的知識を習得する。教職科目では「社会科教育法Ⅱ」を履修し、学習指導案作成のスキルを伸ばし、教育法の習熟を目指す。他に、「特別活動:教職」を履修して、教育に必要な人権意識を習得する。</p>
3年次	前期	<p>法律学、政治学及び経済学、社会学、哲学、倫理学、宗教学の選択科目の積極的な履修を通して、各分野の専門的知識を習得する。教職科目では「社会科教育法Ⅲ」を履修し、公民分野の教育法をさらに習得する。また、人文・社会科学関係のアドヴァンスト科目の一層の履修を通して、知識の専門性を高める。専門演習が始まるので、自分の専門分野を見定め、研究テーマを模索しながら、専門的知識の習得に努める。教職科目では、「教育行政」を履修し、教育関係の法規を理解する。</p>
	後期	<p>法律学、政治学及び経済学、社会学、哲学、倫理学、宗教学の選択科目の積極的な履修を通して、各分野の専門的知識を深める。さらに引き続き、人文・社会科学のアドヴァンスト科目の履修を通して、知識の専門性を高める。専門演習では、自分の研究テーマを設定して、文献蒐集や研究発表に取り組み、専門的知識を高める。教職科目では、「教育方法」を履修し、多様な学習指導方法を習得する。</p>
4年次	前期	<p>学外の教育実習で、教室での教授技法、学習指導案の作成要領を習得する。3年間で培った一般教養・専門教養・教職教養を基礎として、教育職に必要な知識力・教育技法を培う。授業展開では、基礎から発展への論理の組み立て方、発問法、手づくり教材のほかに、生徒の心理に対応した指導力を向上させる。専門演習では、卒業論文の作成に取り組み、研究発表や討論を通して、研究テーマへの理解を深化させ、一層専門的知識を高める。</p>
	後期	<p>教職実践演習で、教育職に就くための資質能力が学生自身の内面に形成されたかどうかを確認し、知識力・教育技能を定着させる。教育実習の経験を踏まえて、模擬授業の水準を向上させる。4年間の一般教養・専門教養・教職教養の履修成果を再検討した上で、知識を補充し、技能を磨く。専門演習では、卒業論文を完成させる。</p>

<文学部人間学科>（認定課程：中学校教諭1種 社会）

（1）各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	本学の建学の精神を大学科目（選択必修）で学び、本学部の三指針を「人間学」（必修）で学ぶ他、本学と本学科の教職課程の理念・目的を「教職ガイダンス」において理解する。また、「アカデミックスキル基礎」（必修）でアクティブ・ラーニングの手法を身につける。それらと共に、共通科目や文学部イントロダクトリー科目で、人文・社会科学関係の幅広い教養を身につけ、そこから学生自身の専攻分野（メジャー）を考える。教職科目では、「教職概論」を履修して、教職の意義や職務内容等を理解し、教職選択の可否を自覚的に判断する。考える。「法学」では、法律学の基礎を習得する
	後期	前期に引き続き、共通科目やイントロダクトリー科目・ベーシック科目で、人文・社会科学関係の教養を深め、学生自身の専攻分野（メジャー）を決定する。教職専門科目では、「教育原論」「教育心理」を履修して、教育をめぐる問題や教育心理学の基礎的知識を習得する。「社会学概論」では、社会学の基礎知識を習得する。
2 年次	前期	日本史及び外国史、地理学の必修概説科目（「日本史概説Ⅰ」「西洋史概説Ⅰ」「東洋史概説Ⅰ」「地理学Ⅰ」）を履修し、各分野の概要を習得する。さらに、人文・社会科学関係のベーシック選択科目を幅広く履修し、専門的知識を習得する。教職科目では「社会科教育法Ⅰ」を履修し、学習指導案を作成するスキルを習得する。他に、「生徒・進路指導論:教職」「教育相談」を履修して、生徒指導や進路指導の問題と課題を理解し、学生自身の教育相談のあり方を構築する。
	後期	前期に引き続き、日本史および地理学の必修概説科目（「日本史概説Ⅱ」「地理学Ⅱ」）と、哲学、倫理学、宗教学の選択必修科目から1科目を履修し、各分野の概要を一層広く習得する。さらに、人文・社会科学関係のベーシック選択科目を引き続き幅広く履修し、専門的知識を習得する。教職科目では「社会科教育法Ⅱ」を履修し、学習指導案を作成するスキルを一層伸ばす。さらに、「特別活動:教職」で、教育に必要な人権意識を体得し、「道徳教育論」では、指導案を作成するなど道徳教育の基本的スキルを習得する
3 年次	前期	人文・社会科学関係のアドヴァンスト選択科目、及び地理学の選択科目の履修を通して、歴史・地理・法律・政治・社会学・経済学・哲学・倫理学・宗教学各分野の知識の専門性を高める。専門演習が始まるので、自分の専門分野を見定め、研究テーマを模索しながら、専門的知識の習得に努める。教職科目では、「教育行政」を履修し、教育関係の法規を理解する。さらに学校インターンに参加し、教育現場を体験する。「介護体験」では、福祉の現場において介護の精神を学ぶ。
	後期	地理学の必修科目「地誌学」の履修を通して、世界や日本諸地域に関する知識を習得する。さらに引き続き、人文・社会科学関係のアドヴァンスト選択科目、及び地理学の選択科目の履修を通して、各分野の知識の専門性を高める。専門演習では、自分の研究テーマを設定して、文献蒐集や研究発表に取り組み、専門的知識を高める。教職科目では、「社会科教育法Ⅲ」を履修し、学習指導案作成や模擬授業を通してより高いレベルのスキルを磨き、「教育方法」では多様な学習指導方法を習得する。さらに、前期に引き続き、学校インターンに参加して教育現場の体験を積む。
4 年次	前期	学外の教育実習で、教室での教授技法、学習指導案の作成要領を習得する。3年間で培った一般教養・専門教養・教職教養を基礎として、教育職に必要な知識力・教育技法を培う。授業展開では、基礎から発展への論理の組み立て方、発問法、手づくり教材のほかに、生徒の心理に対応した指導力を向上させる。専門演習では、卒業論文の作成に取り組み、研究発表や討論を通して、研究テーマへの理解を深化させ、一層専門的知識を高める。
	後期	教職実践演習で、教育職に就くための資質能力が学生自身の内面に形成されたかどうかを確認し、知識力・教育技能を定着させる。教育実習の経験を踏まえて、模擬授業の水準を向上させる。4年間の一般教養・専門教養・教職教養の履修成果を再検討した上で、知識を補充し、技能を磨く。専門演習では、卒業論文を完成させる。